

十日町市

原水協 だより

令和 6 年 10 月号

発行 原水爆禁止十日町市協議会
会長 星野 景子

事務局 十日町市教育委員会
教育文化部 生涯学習課

十日町市本町一丁目上508番地2

TEL (025) 757-5011

FAX (025) 757-5010

Eメール t-edu-gakushu@city.
tokamachi.lg.jp

原水爆禁止十日町市協議会では、今年も原爆犠牲者への慰霊と恒久平和を願い、広島市（八月五日～七日）と長崎市（八月八日～十日）に派遣団を送りました。

広島市には、吉田、下条、水沢、松之山中学校の生徒十三名を含む二十一名で参加し、皆様からいただいた募金の中から、広島市に義援金二十万円、広島原爆病院及び原爆養護ホーム「倉掛のぞみ園」にてお見舞金各五万円と花束をお届けしました。

長崎市には、当協議会加盟団体と事務局の三名を派遣し、義援金十五万円をお届けし式典に参列しました。

以下に、それぞれの派遣団員の感想文を紹介します。

広島市派遣団感想

安らかに眠ってください

広島市派遣団長 嶋村真友子

令和六年八月五日、六日、七日の三日間、吉田中学校、下条中学校、水沢中学校、松之山中学校の代表のみなさんと引率の先生方、総勢二十一名で派遣団として行ってきました。

朝八時に保護者、関係者のみなさんに見送られ十日町を出発し、新幹線乗り継ぎ、約八時間かけて午後二時半広島市へ到着しました。噂にたがわぬ暑さに圧倒されながら、バスへ乗り込み広島市文化交流館へ移動。十日町市民の皆さんから広島市への義援金をお届けしました。広島市健康福祉局、原爆被害対策部調査課長さんより、中学生の皆さんの真剣な質問に答えていただきました。その後、原爆記念公園に移動し千羽鶴を、原爆の子の像に捧げ、原爆ドームを見学し一日目のミッションは終わりました。

二日目は原爆死没者慰霊式並びに平和記念式への参列から始まりました。八時十五分、約七千人の参列者と共に黙とうを捧げました。その一分間暑さを忘れるほど、静寂な時間でした。こども代表の平和への誓いの力強い声が心に響き涙を流す人の姿もありました。慰霊碑に刻まれている「安らかに眠ってください 過ちはくりかえしませんから」という言葉の本当の意味を感じられた式典でした。

続いて平和記念資料館の見学では、一年間で一番入館数が多いと言われる日とあって、前に進めない程混み合っていました。思わず目をそむけたくなるような展示や写真も中学生の皆さんは真剣な眼差しで見っていました。

午後からは、広島市原爆養護老人ホーム倉掛のぞみ園、広島赤十字原爆病院への慰問へ伺いました。倉掛のぞみ園では、はじめに園長より施設の概要をお聞きし、その後入所者の方々へお見舞金と花束をお渡しに。みなさんが笑顔で迎えて下さり、中学生たちもほっとした様子で質問

をしていました。

「私たち世代にしてほしいことは何ですか？」という問いに「愛する家族をたいせつに元気にいてください。」と答えてくださいました。この言葉は原爆の恐ろしさ、大切な人を失う悲しみ苦しみを知っているからこそ、平和を、人々の幸せな日常を願ってくださっているのではないかと感じ、私の心に深く刻まれました。短い時間でしたが被爆者の方々と直接お会いし言葉を交わせた貴重な時間となりました。

続いてバスで移動し広島赤十字病院へ。医院長から施設の歴史や概要をお聞きし質疑の中で「戦争も被爆もないのがいい」というのは簡単だけれどそんなきれいな



「原爆の子像」の前

とでは済まない。原爆の恐ろしさを世界中の一般市民がもっと知らなきゃいけない。でも押しつけがましくちゃいけない。それをどう伝えていくか、みなさん一緒に考えて行動していきましょう」とメッセージを頂きました。その後病院の外へ移動し、メモリアルパークにある「爆風でゆがんだ鉄製の窓枠」や「窓ガラスの破片が突き刺さった痕が残る壁」を見学し、二日間のミッションは無事終わりました。

三日目は、電車と船を乗り継ぎ世界遺産の厳島神社へ。みなさん終始リラックスしながら、受験のお守りや家族へのお土産を買ったり中学生らしい笑顔がたくさん見られました。お昼過ぎに再び新幹線を乗り継ぎ、夜七時半に無事に十日町へと帰ってきました。

この三日間を通して、どこか遠くに感じていた戦争や原爆のことを「自分事」として捉えられるようになったように感じます。簡単ではありませんが、一人でも多くの人が「自分事」として、平和への行動ができるよう伝えていきたいと思っています。また情報館の平和文庫を活用し、子供たちと一緒に学んでいきます。

最後になりますが、この素晴らしい平和への派遣事業を続けてきて下さったみなさまに、心からの感謝を申し上げます。そして、この派遣団のみなさんへ。みなさんと一緒に参加でき、本当に良かったです。有難うございました！

広島から学ぶ平和の尊さ

十日町商工会議所 藤ノ木 鞠

私自身初めての広島市訪問でした。

いつかは広島や長崎そして沖縄などを訪れて戦争当時のことを見聞きしてみたいと思っはいいながらも、修学旅行等でも機会がなく、自らダークツーリズムを行うでもなく。そんな折に今回の広島派遣に参加する機会を得ることができました。関係機関の皆様に感謝いたします。

広島市の原爆慰霊祈念式に参加して、この式典は、戦争の悲劇を決して忘れることなく、平和を願うための重要な機会であると改めて感じました。

式典の始まりではまず、被爆後に苦しみながら水を求めて亡くなられた方々へ献水が行われました。その静かな瞬間は、戦争の恐ろしさとそれによって失われた多くの命に対する深い悲しみを実感させられました。また式典で特に印象に残ったのは、児童が読み上げる子どもの平和への誓いです。その中で「家族や友達と平和の尊さや命の重みについて語り合いましよう」という呼びかけがあり、未来に向けての希望と、私たち一人ひとりが果たすべき役割について考えさせられました。

そして、広島市の町並みも非常に印象的でした。戦後整備された平和記念公園は二つの川に挟まれた中洲のような場所にあり、うだるような暑さでしたが爽

やかな緑あふれる広く綺麗な場所でした。八月五日に到着した時には私たちと同じように慰霊のために訪れた多くの方であふれていました。公園のそこかしこに平和のための石碑やモニュメントがあり、そのいづれにも千羽鶴が捧げられています。過去の悲劇を乗り越えた街と、平和を祈るたくさんの人々に触れ、私たちがどのようにして未来をより良いものにしていくかについて考える機会を得ることができました。



世界遺産「原爆ドーム」の前

今回の派遣でより歴史への理解を深め、平和の尊さを感じることができました。また同じ派遣団に参加してくれた市内中学校の生徒の皆さんの積極的に学習・聞き取りを行う姿勢がとても素晴らしかつ

たです。この経験を通じて、平和を守り続けるために何ができるかを改めて考え、自分自身の行動に反映させていきたいです。

平和への一歩

十日町平和センター 水落佳輝

「当時のことを思い出すのは、とても辛いことです。しかし、これから生きる方に、平和の尊さを伝えていくためには、私は当時の悲惨な状況を話していかなくてはなりません。」

原爆養護ホームに入所されているその方は、少し涙ぐみながら、お話ししてくださいました。

七十九年前の八月六日、一つの爆弾が投下されました。その直後の爆心地付近の温度は約四千度。

一瞬のうちに影だけを残して亡くなった方、体の大部分の皮膚が垂れ下がるほどの火傷により亡くなった方、凄まじい爆風により建物の下敷きになって亡くなった方。

「あの時のヒロシマは地獄だった。」、被爆者の方はそう語ります。

私は今回、平和センターからの派遣で、広島のを二十五年振りに訪れました。以前は、中学校の修学旅行でしたが、「ただ怖い」としか思えませんでした。

しかし、それから自分の周りも変化し、大切な家族ができた今、「ヒロシマ」の

悲劇が私に訴えかけるのは大きく違って
いました。

当時の証人である原爆ドームや旧広島
赤十字病院のモニュメント、平和記念資
料館の展示物は、無言で、どれだけの悲
劇が起きたのかを体現しており、私はた
だただ圧倒され、涙を流さずにはいれま
せんでした。今の自分が過ごす世界はな
んと平穏なのだろうと。

今でも、世界では戦争が続いています。
人と人が殺し合うこの行為に、勝者も敗
者もいません。そこにはただ、大切な人
を失ってしまう、悲しみしか残りません。
先述の原爆養護ホームに入所されてい
る被爆者の方は、「平和のためには、ま
ず愛する人を大切にすることです。」と
話されました。まさにその言葉が真理で
はないでしょうか。

平和記念式典でのこども代表の誓いの
言葉を引用します。

「願うだけでは、平和は訪れません。
色鮮やかな日常を守り、平和をつくって
いくのは私たちです。」

まずは身近な人を大切に思うこと、そ
こから平和への一歩を踏み出していきま
しょう。

なぜ平和へ進まないのか

吉田中学校三年 児玉明謙

僕は今回の広島派遣で原爆についての
多くを知りました。そのおかげで、平和

についての考え方も大きく変わり、より
現実に近い気がします。

初日に原爆ドームを見たとき、その崩
れように僕のイメージの何倍も大きい規
模の影響を目の当たりにしたようで、驚
きました。それらが資料や写真などから
の想像だけでは分からないことがあるこ
とを僕に示してくれました。

そして、八月六日、八時十五分の黙祷
による静けさが平和への思いを物語って
いました。平和記念式典の後の原爆資料
館ですが、救いようのない過去やどうし
ようもない現実が、はっきりと僕の前に
姿を現したようで足元が揺らぐような感
覚が僕の中でずっと響いていました。

資料館を後にし、広島原爆養護ホーム
に訪問しました。そこで戦争やそれらが
残した禍根などの状況を経て、僕たちに
考えてほしいことは何か聞いてみたところ、
愛する家族など周りの人への思いを
大切にしてほしいと答えてもらいました。
相手を思いやり、尊ぶ心。そういったも
のが平和を生むと教えてもらいました。

原子爆弾によって奪われ消されたもの
はあまりにも多く、爆風・熱・放射線、
それらがその先にも残した悪影響はとて
も大きかった。実際に様々なものを見て
きて、僕は果たして今の地球を平和にす
るのは本当に可能なのだろうか？と、悲
観的な問いが頭をよぎるようになりまし
た。今の地球は遠くその理想から離れて
いる気がします。核兵器は平和へと動か
ない人たちのためにある。そして、動か

ない人たちがいるのは当たり前になって
います。そんな世の中をただボーッと見
て、平和へ動かない無責任なものになる
のではなく、自ら平和へ変わっていきたく
いと考えるようになりました。

平和を実現させるために

吉田中学校三年 村山羽菜

今から七十九年前の八月六日午前八時
十五分、広島に落とされた一つの原爆に
よって、明るくにぎやかだった広島は地
は地獄へと変わってしまいました。私は、
派遣団の一員として広島市を訪ね、平和
記念式典への参加や、広島原爆養護ホー
ム倉庫のぞみ園を訪問し、実際に被爆者
の方にお会いするなどのたくさんの経験
をしてきました。

一番印象的だったことは、式典での現
地の小学生が行う「平和への誓い」で
す。「願うだけでは平和はおとずれませ
ん。色鮮やかな日常を守り、平和をつく
っていくのは私たちです。」そう力強い
声で話した二人の小学生の姿は今でも鮮
明に覚えています。

また、被爆者の方からの「差別やいじ
めをなくし、元気にすごす。そして、家
族を大切にしてください。」という言葉
は、これからの生活の中でしっかりと心
の中にとめて過ごしていきたいと感じま
した。

広島派遣で思ったこと

吉田中学校三年 柳 若奈

僕は八月五日から七日まで派遣団とし
て広島市に行ってきました。この派遣の
中で僕の心に特に残ったことは二つあり
ます。

一つ目は、平和記念資料館の見学です。
資料館には、多くの被爆者の方の遺品
や証言、当時の事を語った記録、カメラ
マンや調査団による写真や映像が展示さ
れていました。その中でも僕がとても衝
撃を受けたのは、被爆者の方が描かれた
当時の様子の絵と、当時の事を語った記
録です。絵は血だらけの人や海に流され
戻ってきた変色した幼児など、とても信
じられないようなものばかりで恐ろしく
なりました。被爆者の方の記録はなくな
った家族の遺品とともに展示されていて、
内容もとても悲惨で思い出すのがつらか
ったろうなと思いました。

二つ目は原爆養護ホームに行ったこと
です。僕は被爆者の方に花束を渡す役目
があったのですが、前々から渡す時に何
かを言ってから渡そう、と思っていまし
た。ですが被爆者を前にして突然何を言
ったらいいのかわからなくなり、考えて
いた言葉も言えずにそのまま渡してしま
いました。それがとても悔しかったです。
これからは、戦争や原爆のこと、そし
て被爆者やその遺族の方々など、まだ残
っている多くの問題に向き合い自分にで

きることを考えて、行動していきたいと思っています。

広島を訪れて

吉田中学校教諭 上村夏生

今回の広島派遣で私は初めて広島を訪れた。原爆ドームや原爆で犠牲になった方々の写真は今まで何度も見てきた。原爆被害を受けた当時の状況を思うと、この街並みを作り上げた先人たちの努力に頭が下がる。

式典には日本各地だけでなく、世界の各国からも出席している様子が見受けられた。しかし、来賓名簿にロシアの名前は無かった。どの国を招待するかという問題は現在中東情勢を緊迫させているイスラエルとガザ地区も同様だ。長崎の式典ではイスラエルを招待しなかったことによって西欧の複数の国の大使が出席を辞退した。広島や長崎の平和記念式典で、平和を祈り、慰霊し、純粹に平和に対して向き合うことはできないものかと疑問に思う。国としての事業ではなく、市としての事業なのだからなおさら政治的な駆け引きの場としてはふさわしくないと感じる。

式典の最中には、演説を妨害しようとする活動も見られた。平和を祈り、慰霊するこの時間にそのような活動をする人たちがいるということを知ることができたのは良い経験だった。同じ日本人でも

平和や慰霊に対する認識が違うのだろう。同じ民族でも考え方が違うのに、世界の人々が平和に対して同じ方向を向くにはまだまだ時間がかかりそうだ。

施設等の方々からの話の中で、被爆者手当なるものがあるということを知った。罪のない女性、子供、お年寄りの命を奪い、被爆させたのはアメリカにもかかわらず、なぜ県や国がお金を出すのか。原爆投下は戦争ではなく国際法違反の虐殺である。それを日本だけで背負って生きているように感じた。勝てば正義、力が正義の世の中を変えるためには日本の発信力がより求められると思う。

あの時の広島は、地獄だった

下条中学校三年 村山日真莉

八月五日から、七日にかけて、私は広島派遣団の一員として、広島へ行った。そこでは、様々な場面でこの言葉が放たれた。「あの時の広島は地獄だった」と。

焼け焦げ原型のない衣服、たれた皮膚影のように人の跡が焼き付いた壁…。平和記念資料館には、今、自分の目に映る鮮やかで美しい広島姿からは想像もできない事実が残されていた。まさに「地獄」といえる、恐ろしいものだった。

数ある被爆者の痛ましい写真の中には、幼い子どもや、私と同じくらいの年齢だと見受けられる人々も映っていた。もし、私だったら…。考えただけでも、涙が溢

れそうになり、今ある平和の尊さに強く感謝した。

広島赤十字病院を訪問した際、院長は「核兵器なんて、あっていいものじゃない」と話された。原爆によりここまで恐ろしいことが起きたのに、今もお核兵器を所持することは間違っている、と。私もその考えに深く共感した。世界では、未だ戦争が絶えない。私たちが過ごしている平和な日常は、当時の広島や今なお戦争が続いている世界の国々にとっては、当たり前ではない、本当に貴重なものだと思う。願うだけでは、平和は叶わない。ならば、今の私たちに何ができるのか。

平和な日常に、感謝すること、広島派遣という貴重な体験を伝え、広めていくことだ。

被爆者の方々の平均年齢が、八十五歳を超え、原爆ドームも、いつ崩れるかわからないとされる今、七十九年前に広島が「地獄」と化した事実、核兵器の恐ろしさを、私たちが次世代に繋げていこう。「平和」について、考え続けよう。

平和と命の尊さ

下条中学校三年 村山実優

今から七十九年前の八月六日、広島は一瞬にして焼け野原となり、たくさんの方々が失われました。原爆ドーム、平和記念資料館の視察や、被爆者の方々からお話を聞き、平和と命の尊さや戦争の恐ろ

しさについて改めて考えることができました。

原爆が爆発する場合、放出するエネルギーの約五十パーセントは爆風、約三十五パーセントは熱線、約十五パーセントは放射線であると言われています。熱線と爆風により火事嵐が吹き荒れ、広島市の建物の半分以上が全焼、全壊するといった、想像を絶する威力でした。

爆発が終わった後も、放射線の影響でたくさんの方が苦しんでいました。平和記念資料館には、被爆者の「魂の叫び」や遺品、当時の写真、当時の様子を描いた絵が並んでいました。

火の海の中で「いたいよ。たすけて。」と叫ぶ子どもの絵がとても印象的でした。被爆者のことを考えると胸が締め付けられる思いでした。

「色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです」この平和への誓いが心に残っています。七十九年前のような悲劇を二度と繰り返さない、平和な世の中になることを願っています。

広島市派遣で学んだこと

下条中学校三年 藤田紗南未

私は市の代表として、原爆の被爆地である広島県に行ってきました。現地では様々な場所に訪れ戦争の恐ろしさや、平和の大切さを学びました。私が特に印象に残っているのは当時被爆された方から

のお話です。三歳の時に被爆された方が、被爆当時の記憶を真剣にお話ししてくださいました。お話を聞いて、ひとつの爆弾により全てを失った広島の人、「助けて」と訴える人、家族をなくし孤独な思いをしている人、このような場面が想像できました。そして、お話ししてくださった被爆者の方からは悲しんでいる様子が伝わり、戦争は七十九年経った今でも心に影響をもたらすとても恐ろしいことなのだと実感しました。

このような悲劇を二度と繰り返してはいけません。そのためには子供である私たちが戦争について考えることが重要となっています。考えの違いから起こるいじめや差別が戦争へと繋がります。未来を託されている私たちが、いじめや差別を許さないことで、争いが無い日々を作ることができるはずです。広島、長崎が最後の被爆地となるかどうかは私たち次第です。七十九年前の悲劇を二度と起こさないために過ぎ去ったことだと思わず、自分たちにできることを一緒に考えていきたいと思っています。

平和への願い

下条中学校助教諭 南 雲 勝 紀

八月五日から七日まで広島市派遣団の一員として、広島市を訪問しました。この三日間の中で、平和記念式典や被爆体験者の方々から何度も語られていたこと。

それは、「平和への願い」でした。

戦争という恐ろしい体験、原子爆弾の熱風と爆風によって、多くの尊い命が一瞬にして奪われた体験、私たちには、想像もつかないような辛く悲しい出来事。私自身、資料館訪問や講話をお聞きする機会は過去に何度かありましたが、改めて戦争の残酷さを感じ、人々の心と体に悲しく残されるものだと、感じる事ができた時間でした。

実際、平和記念式典の会場へ行ってみると言いようのない感覚に襲われたことを今でも鮮明に覚えています。式典での暗く重い言葉は、当時の悲しい出来事を物語っているようでした。原爆は、戦争が起きたことをきっかけとして投下されました。こんなにも人々の心と身体を傷つける残酷なことは、もう二度とあってはならない。世界中が、自分の身の回りの人々が、愛する家族がいつまでも平和に暮らせるようにと願いながら黙祷を捧げました。

式典で代表児童が話した、「平和への誓い」の以下の言葉が印象に残っています。

「願うだけでは、平和はおとずれません。色鮮やかな日常を守り、平和をつくらなければならない私たちです。一人一人が相手の話をよく聞くこと。違いをよさと捉え、自分の考えを見直すこと。仲間と協力し、一つのことを成し遂げること。私たちにできる平和への一歩です。」

訪問先の、のぞみ園様でも入園者の方が「平和な世の中をつくらなくていくために、自分自身、家族、身の回りの人々をまず大事にしてほしい」と仰っていました。人は誰しもが、助け合わなければ生きていくことはできません。誰に対しても優しく接し、手と手を取り合って支え合える世界を目指すこと。戦争の悲惨さを後世に伝えていくことが、私自身にできることだと強く感じました。

広島派遣で感じたこと

水沢中学校三年 金澤 美晴

私は今回の広島派遣で戦争のことについてたくさん知ることができました。

一日目は「原爆の子の像」を見た後に、十日町市の中学生が学校ごとに作成した折り鶴を奉納箱に納めました。そこには既に、私たちが納める前から沢山の鶴が奉納されており、多くの人の平和への願いを感じました。

二日目は平和記念式典に参列し、その後、平和記念資料館を見学してきました。気温が三十度を超えるとても暑い中でしたが、式典には多くの人が参列していました。被爆者の遺族や、外国人、各国の政府関係者、学生の方などがたくさん参列する中、十日町市の派遣団の一人として参列できたことは、自分にとって良い経験になりました。被爆者名簿には毎年多くの人の名前が追加されていると聞

き、やるせない気持ちになりました。また、資料館に展示されていた戦争についての絵や詩、建物の一部や服などを見てみると、原爆の恐ろしさが伝わってきて、胸が苦しくなりました。

広島派遣を通して戦争のことについて詳しく知ることができ、深く考えるきっかけになりました。ここで得た学びを大切にしながら、平和のために自分ができることをしていきたいです。

忘れないことの大切さ

水沢中学校三年 金澤 由花

小学生の頃「はだしのゲン」という漫画を読み、原爆の悲惨さを感じました。しかし日本に原爆が落ちたという実感はなく、他人事のように考えていた部分があったと思います。

広島派遣では平和記念資料館を見学する時間や、被爆者の方々とお話しする時間がありました。平和記念資料館には、ロボロの子供服、真っ黒になったお弁当、当時の人が書いた手紙などが展示されていました。事前にインターネットで調べていたが、画面越しに見るのと実際にその場に行ってみるとでは全く感じ方が異なり、原爆の恐ろしさがひしひしと伝わってきました。当時の被爆者の写真や、言葉の一つ一つをじっくり読んでみると、どんよりと心が重くなっているのを感じました。また、施設を訪問し

て被爆者の方々から伺った当時のお話は、「はだしのゲン」を読んだ時よりもずっと戦争の悲惨さや苦しみを感じ、胸が痛みました。

実際に広島に行ったことで、戦争や平和について自分事として感じたり、考えたりすることができました。今回の学びを忘れず、戦争で苦しむ人のいない平和な世界になることを願って、次の世代へ伝えていきたいです。

原爆について考えたこと

水沢中学校三年 上村愛唯弥

私が広島平和記念資料館の見学や被爆者の方から当時のお話を聞いて感じたことは、「怖い」の一言に尽きます。

資料館に展示されていたたくさんの写真、絵、体験談などから、被爆者の痛みや悲しみが伝わってきました。その中でも特に印象に残ったものは、被爆した後、命からがら水を求めて貯水槽に來たものの、そこで亡くなってしまった人々の様子を描いた絵です。どんなに苦しかっただろうと想像し、恐怖のあまり直視できませんでした。また、今の私と同じ年で被爆した人の展示物を見たときには、予期せぬ一発の原爆投下で奪われてしまった日常、家族、友達を想像し、涙が出そうになりました。

被爆者の方から教えてもらった当時のお話は、資料館で展示物を見るのとはま

違った重みがあり、原爆による悲劇を二度と繰り返してはならないと強く感じました。

今回の広島派遣を通じて、戦争や原爆が人々の笑顔を奪い、世界を地獄に変えてしまうことが改めてわかりました。世界中の人々が笑顔で暮らせる未来を目指して、唯一の被爆国に暮らす一人として核の廃絶を訴えていきたいです。

広島派遣を通して

水沢中学校二年 金澤優杏

八月五日から七日の間、私は広島市を訪れ、原爆や戦争、平和について学んで



広島市平和記念公園入口付近

きました。

私がこの広島派遣で特に印象に残ったことは、まず、平和記念式典で代表の小学生が発表した「平和への誓い」です。会場に響き渡る力強い声は、一言目から私の心を揺さぶり、平和の大切さを伝えてくれました。また、式典の後に訪れた広島平和記念資料館では、自分の想像をはるかに超えた壮絶な光景が広がっており、とても強い衝撃を受けました。展示されていた写真には一切の笑顔がなく、原爆や戦争の恐ろしさ、当時の人たちの心や身体、生活の苦しみなどが頭に思い浮かびました。平和の尊さや、平和な日常が当たり前ではないことを、改めて実感することができた時間になりました。

七十九年前の八月六日、たった一つの原因により、多くの人の命、未来が奪われました。そして今でも、苦しんでいる人がたくさんいます。この事実が時間の経過とともに人々の記憶から消えてしまわないように、また、このような悲劇が繰り返されることのないように、今回の広島派遣で学んだことを、責任をもって伝えていきたいと思っています。

広島で学んだこと

水沢中学校二年 藤原美織

私は、広島派遣団の一員として、八月五日から三日間、広島市を訪れました。原爆ドームや平和記念資料館など、今ま

で教科書やテレビでしか見たことのなかった場所へ実際に赴き、特に印象に残ったことが二つあります。

まず一つ目は、平和記念式典です。式典の中でも特に印象深かったのは、こども代表による「平和への誓い」です。力強い声で私たちが平和のためにできることを訴える姿を見て、私は平和な世界を実現するためには、戦争や平和について、全ての人が考え、学び続けることが大切であると感じました。

二つ目は、平和記念資料館です。館内にはボロボロになった建物の一部や、とてもひどい火傷を負った人たちの写真がたくさん展示されており、恐怖を感じました。そして、改めて原爆が人々に及ぼす影響について学ぶことができ、このようなことは二度と起きてはならないと強く感じました。

私は、この三日間の派遣で学んだ戦争の悲惨さや平和の尊さを、周りの人に伝えていくことで、世界の平和に少しでも貢献していきたいです。

平和のためにできることを

水沢中学校教諭 井戸川奈央

「これはぼくらの叫びです。これは私たちの祈りです。世界に平和をきづくための」初日に訪れた「原爆の子の像」の下に置かれた石碑。そこに刻まれていた文章に、胸が締め付けられる思いでいっ

ばいになりました。

私にとってこの広島市派遣は、原爆によって奪われたたくさんの命と正面から向き合う機会になりました。学生時代、原爆がもたらした被害について学びました。しかし、恥ずかしながら当時は原爆の脅威にばかりに意識が行き、命を落とした人々の苦しみや、残された家族の心の痛みまで想像することができませんでした。今回、平和記念資料館を訪れ、生前の写真と、側に展示されたボロボロの衣服や持ち物を見た時、この人はどんなに生きていたかっただろうか、家族は生きていてほしいと願っただろうかと考えました。そして、やるせない思い、原爆に対する恐怖心、平和な世を生きていることへの感謝など様々な感情が押し寄せてきました。

理不尽に命が奪われる悲劇を、決して繰り返してはなりません。そのためにもまずは、今回の派遣で感じた気持ちを忘れず、明るい未来に向けてできることを生徒と共に考えていこうと思います。

広島派遣で学んだこと

松之山中学校三年 南 雲 愛 友

一九四五年八月六日午前八時十五分、一つの原子爆弾によってにぎやかだった広島は大きく変わりはててしまった。私が広島派遣で一番印象に残っていることは、平和記念資料館です。平和記念

資料館では、教科書には載っていない内容が多く、自分が戦争や原爆について知っていることを改めて確認したり、知らなかったことを知るいい経験ができました。資料館の展示品は、見て衝撃を受けたものが多く、すぐ胸が苦しくなりました。ですが、目を背けずに最後までまわりきることができて良かったです。原爆で焼けこげたお弁当やぐちゃぐちゃになった自転車、黒い雨と血で染まった特攻服、焼けただれた人たちの姿の写真は今までも忘れられません。私は、この広島派遣で命の重さや生きていることのすばらしさを学びました。「願うだけでは平和はおとずれない」この誓いの言葉が私の心に深く刺さっています。平和になるといいな。と願うのではなく、自分の力で戦争や原爆の恐ろしさを伝え、世界に発信していくことが大切だと思います。今、生きていること、たくさんの人への感謝の気持ちを忘れずに過ごしていきたいです。

戦争のない世界へ

松之山中学校二年 田 邊 萌 衣

私は八月五日から七日まで、広島派遣団として原爆についての恐ろしき、平和の尊さを学んできました。

その中でも私が特に印象に残っているのは平和記念資料館です。原爆によって焼けただれた身体、母親が子どもに「目

をあけて」と泣きさげぶ姿などたくさんの資料があり、どれも胸が苦しくなりました。私と同じ年齢の人たちが家族や友達を失ってしまうことは想像を絶するほどの深い苦しみや悲しみがあると思います。

また、原爆ドームも見えました。実際に見たからこそ、当時の被害の大きさを実感することができました。目で見て、耳で聞いて心で感じることができました。広島に原爆が落とされて、七十九年がたちました。ですが、今もなお原爆によって苦しめられている方々があります。これから、戦争がない、平和な世界をつくるためにも今ある幸せを大切に、多くの人々に広島市の原爆について伝えていきたいと思っています。広島派遣という貴重な体験をさせていただき、ありがとうございます。

広島派遣を通して考えたこと

松之山中学校教諭 安 村 尚 樹

今回、私は十日町市広島派遣団の一員として広島を訪ねました。私自身、学生時代に修学旅行で広島を訪れたことがありましたが、その時は漠然と「原爆や戦争って怖いなあ。」くらいにしか考えてなかったように思います。今回の訪問では、改めて平和の尊さについて深く学んでこうと強く決心し、実際に多くの事を学び、考えることができました。

平和記念資料館では、戦争の惨禍を物語る様々な資料が展示されていました。原爆によって大火傷を負い、ただれてしまった皮膚を写した写真、原爆投下時刻の八時十五分で時が止まった時計、原爆によって焼かれてしまった三歳の男の子の三輪車、黒い雨の斑点が残るリュックサックなど、どの展示物も目を背けてしまいたくなるような惨状でした。何の罪もない人々の生命や平穏な日常を奪った原爆のむごさに憤りを感じ、核兵器廃絶への思いがより強くなりました。また、老若男女、そして世界各国の人々がこの平和記念資料館を訪れ、展示物を熱心に見ている様子が印象に残りました。世界中の多くの人々が平和について学び、考えを深めているということが分り、嬉しくなりました。

また、私たちは平和記念式典に参列しました。平和記念式典で一番印象に残ったのは広島市の小学生による平和への誓いです。その一節にこのような言葉がありました。「願うだけでは、平和はおとずれません。色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。」

この言葉を聞いて私には何ができるだろう、と考えさせられました。私は中学校で社会科学を教えています。社会科学の教員として子どもたちに伝えていかなければならないことはたくさんあると思います。今回の広島派遣での学びをより深めていき、将来を担う子どもたちに平和の尊さを伝えていくことが私の責務だと考

えています。

今回はこのような貴重な機会を与えていただき、ありがとうございました。

長崎市派遣団感想

長崎派遣に参加して

長崎市派遣団長 阿部 正志

当日は暑かった。実際の気温は三十度と新潟と変わらないが、酷暑とも思える暑さを感じた。そしてその暑さも生涯忘れられない経験となった。

長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典は、原爆が投下された八月九日に毎年平和公園で举行される。

式典は、原爆犠牲者のご遺族をはじめ市民参加のもとに行われる。長崎市民の平和宣言は、インターネットを通じ国連加盟の各国、全国の地方公共団体に発信され、核兵器根絶と恒久平和の確立を訴える。

併せて、被爆者代表の方の「平和への誓い」をお聞きし、この日を暑いと思った自分を恥じた。

原爆投下の数日後、ご自身の学校で目にした凄惨な光景を詳細に話された。そののち、学校が死体処理場となり、命ある人も水を求め彷徨う姿は、再現ドラマで見たことはあるが、現実には想像を超え惨烈を極める。

年月と共にこの惨状を語り継ぐ人が減少していることはやむを得ないが、長崎から発信され続ける平和への思いは決して風化されてはならない。

今回の長崎派遣を通じて、時代が移り変わり、変化の大きな現代社会だからこそ持続的に社会に貢献し続けることを目指したい。

結びにあためて今回の派遣に際しまして、関係者への皆様には厚く御礼を申し上げます。ありがとうございました。

世界平和の尊さ

公明党 宮沢 幸子

この度、長崎市で行われた被爆七十九周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列させていただきました。式典前日の八月八日に長崎市に義援金をお届けし



平和公園へ千羽鶴奉納



長崎市への義援金お届け

た後、原爆資料館を拝見させていただきました。目を覆いたくなるほどの資料の数々に原爆の恐ろしさ、被爆された方々が今なお後遺症に苦しみ癒されない心の傷にさいなまれている姿が飛び込んできました。翌日、酷暑の中で開催された式典では長崎市の学生に皆さんが熱中症対策でペットボトルやキンキンに凍ったおしぼり等を細やかな気配りで配布している姿に暑い中でも爽やかさを感じました。

鈴木史郎長崎市長の平和宣言では、「核兵器が存在する故に、人類への脅威が一段と高まっている現実を直視し、核兵器廃絶に向けて大きく舵を切るべきです。」「軍拡や威嚇を選ぶのではなく、対話と外交努力により平和的な解決への道を探ることを求めます。」「世界平和を希求し、被爆された方々に寄り添いながらSDGs 持続可能な平和な未来を世界中に要請する言葉と共に「長崎を最後の被爆地に」は

共感と並々ならぬ決意を感じました。来年は被爆八十年の節目の式典になります。語り部の皆さんの高齢化に伴い生の言葉を伝え続ける事が出来なくなります。

私たちの使命は機会あるごとに、この長崎市派遣で学んだ様々な事柄や平和の尊さ、更に人命の尊さを伝える事、その大切さを痛感しました。



令和六年度広島市派遣団

広島市派遣団長

十日町商工会議所

十日町平和センター

吉田中学校生徒代表

学校教諭

下条中学校生徒代表

学校教諭

水沢中学校生徒代表

学校助教諭

松之山中学校生徒代表

学校教諭

令和六年度長崎市派遣団

長崎市派遣団長

公明党

阿部 正志

宮沢 幸子

嶋村真友子

藤ノ木 鞠

水落佳輝

児玉明謙

村山羽菜

柳 若奈

上村夏生

村山日真莉

村山実優

藤田紗南未

南雲勝紀

金澤由花

上村愛唯弥

金澤優杏

藤原美織

井戸川奈央

南雲愛友

田邊萌衣

安村尚樹